

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 浦 一章

浦一章氏の『工房の秘密を求めて——ダンテへダンテから』は、著者が長年その研究に取り組んできたダンテ初期の作品『キタ・ノワ』Vita Nova（従来訳では『新生』）を主要な考察対象に据え、文献の博搜と精緻な分析に基づいて作品構造および作品の成立過程に関して新たな知見を付け加えつつ、広くダンテの創作方法の本質に迫った全4部17章より成る大著(詳細な註を含め全910頁)である。

第1部「構造と引用——『キタ・ノワ』をめぐって」(全5章)では、韻文とその韻文を軸に自伝風の物語を紡いでいく散文を交互に配した作品 Vita Nova をめぐり、その構造を新たな視点から考察するとともに、ダンテがさまざまな時期に書いた自作詩篇を別個の散文の文脈のなかに自在に取り込んでいく手法、ダンテが過去の文学伝統に対して行った借用の実態を詳細に検討することにより、この作品の生成過程を明らかにしている。第1章では、近年の研究動向を踏まえつつ、M.バルビ版(1932年)をはじめ従来採用されていた章分け(全42ないし43章)に物語性の観点から再検討を加え、独自の章分け(全33章)を提案している。続く第2章から第5章においては、ダンテ自らがこの作品を「記憶の書」になぞらえていることに着目し、先行する文学的伝統たる「潜在的書物」からの借用という視点から作品を読み解く方法を提唱し(第2章)、「喰られる心臓」(第3章)、「予兆をもたらす夢」(第4章)という具体的なトポスとの関連を検討したあと、自らの過去の詩篇の意味を意識的に変容させていくダンテの手法を作品生成の解明及び読解に生かすべきことを、十分な説得力をもって主張している(第5章)。

第2部『「記憶の書」を繙きながら——先行恋愛詩から学ばれたもの』(全5章)においては、作品に含まれる詩篇そのものの成立を主題とし、第1部で実践された方法を用いて詩篇に取り込まれた伝統的要素の解明を目指している。第6章で作品全体の語り手である「私」そのものの表現にみられる文学的範型性を指摘したあと、第7章から第9章においてシチリア派のジャコモ・ダ・レンティーニの詩篇との関連を詳細に論じ、ダンテにおけるこの詩人のもつ重要性を実証し、第10章では南仏の詩人アルナウト・ダニエル及びペトラルカとの関連を論じている。

第3部「境界線を挟んで」(全3章)ではダンテと英国近代のブレイクとの関連(第11章)、『神曲』地獄篇に含まれるウルクセースの挿話(第12章)、『水陸論』(第13章)について論じられ、Vita Novaの作者にとどまらないダンテ像が提出されている。第4部「補論集」(全4章)にはダンテ理解に役立つ文学史的背景等を論じた論考が収められている。

本論文はダンテ Vita Nova に関してかつて日本語で書かれた最も詳細な論考であり、今後わが国でこの作品を論じる際にまず参照されるべき論文になることは疑いをいれない。考察が多方面にわたるゆえ、論文全体の主旨がときにみえにくくなる部分があるものの、本論文で得られた成果は世界のダンテ学に大きく貢献する水準にあると評価される。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。